

<http://grimreaper.is-mine.net/>

正義の剣
と
死神の鎌

著：射月アキラ

意識が、混濁する。

指の一本すら自らの意志で動かさない——というより、指を動かそうとする意志すら、レビの中には芽生えなかった。逃げるという意志すら生じず、怖いという感情すら薄れていく。

ただ、視認する。

レビがいるのは、埃とすすで汚れた裏路地だった。建物の隙間をぬうように走る道は狭く、両側にそびえ立つ木造の二階建て家屋がさらに閉塞感を強調する。

昼間であっても暗い空間は、深夜、その暗さを存分に発揮した。満月が真上にあるため、まだ明るい方ではあるのだが、覚束ない明かりでは暗闇に閉ざされた場所が多い。

さらに、目の前には道を塞ぐようにして三人の男が立っていた。深い赤を基調とした衣服をまとい、木製の杖を携える姿は山奥に住まう隠者のようだったが、眼光はそろって鋭くレビを射抜いている。

視線に含まれているのは殺意。齢十二の少女を相手にして、三人の男が油断も躊躇もなく向ける感情ではない。

両刃の剣をたずさえ、レビの右腕が持ちあげられる。切っ先を向けられた男たちが重心を低くして構えをとった。視線はさらに鋭くなり、レビの恐怖心が浮かんでは消える。

恐怖し拒絶するレビ自身の心を裏切り、体は男たちとの闘争へと一步を踏み出した。

一直線に突進するレビに対し、男たちは杖を掲げて応じる。レビがもう一步踏み込めば剣の間合いに入る、というところで、三本の杖の先端から人間の頭ほどの大きさの火球が飛び出した。

闇に包まれていた裏路地が、突如発生した光源に照らされる。目くらましと殺害、両方の意図をもった火球を目前にしてレビに生まれた恐怖心は、やはり即座に消し去られる。

頭部と胴体を狙った必殺の炎の前に、レビの脳は最大の処理能力で応じた。時間は引き延ばされ、火球が刻一刻と形を変える様すら視認する。照らされた

路地の隅、放置された木箱の陰でネズミが走った。勝利を確信した男が口を歪めて笑む。

急増する情報量を前に、体は硬直して動かなくなるはずなのだが——レビの体はからくり仕掛けの人形のように、あくまで機能的に行動した。

「正義に、反、する、罪、ぶか、き、火を、断て」

レビの唇が言葉を読みあげる。

伴って放たれる剣戟は神速。鋼鉄の刃が風を斬り、斬られた風が火球を切る。

副次的に発生した強風が男たちを半歩ほど退かせ、隙のなかった体勢に乱れが生じる。

彼らが姿勢を整えて視線を戻すまで数秒。その間に、レビの足は地面を蹴り、壁を蹴り、振り抜かれた剣が男の首を裂く。

噴き出す鮮血。再度乱れる体勢。混乱する男ががむしやらに放った火球をかいくぐり、レビは低い姿勢から胴体を逆袈裟に切り裂く。一呼吸の間に二人が斬殺され、生き残った一人は杖を構えたまま呆然とレビを見つめた。

もはや、レビの中に感情や思想はない。

ただひたすらに、正義に基づいて目の前に立ちふさがる障害を排除する。

排除するのは誰にとつての障害か？

基づくのは誰にとつての正義か？

自らに問うことすらできず、レビは無抵抗な相手に容赦なく刃を突き刺した。

三つの死体に囲まれて立ち尽くすレビに、背後から声がかけられる。

「よくやった、我が正義」

慈しむような声に抱いた嫌悪感も、レビの中から一瞬で消え去った。

想像力は、力だ。

強固な意志と集中力、さらにそれらを補助する象徴があれば、人々の想像はそのまま現象としてあらわれ、周囲に影響を及ぼす力となる。

たとえば、火の象徴である杖を使った火球の精製。

たとえば、風の象徴である剣を使った速度の上昇。

それらの能力は魔術と呼ばれ、ヒトの発展と共にあった。大抵の場合、魔術

の発展はそのまま人々の生活レベルの向上につながり、象徴に関連した知識の有無が貧富の分かれ目にもなっている。

はずなのだが——強力な魔術的象徴を扱っているものの、レビは路地裏で生まれ育ったと言われても疑問を抱かないような姿をしていた。癖の強い赤毛の上に、深くかぶったつば付きの帽子。袖も裾も布があまった少年のような服をまとい、生気のない三白眼で無気力に周囲を見まわす姿が、町に暮らす少女たちとは明確な一線をひいている。

野生に生きるネコと、ヒトに飼われたネコが相容れないように。

他を信じず、疑いの視線を向け続ける彼女の瞳は——しかし、今日この日だけは煌々と光が灯っているようだった。

目を向けた先にあるものは——刃物。

黒いローブで全身を覆い隠した男が背負った、特徴的すぎる刃物だった。

レビ自身の身の丈よりも長い漆黒の柄の先に、赤い三日月型の刃がある。「刃物」といえば、命を絶つ道具として「死」に連想しやすいものではあるが、男の背負う刃物はさらに、ひととき強く「死」をイメージさせた。

彫刻や飾り紐などの装飾は全くない。徹底的に機能性が重視されたことによって、分かりやすい骸骨などの彫り物がなされているよりもむしろ「死」と関連付けしやすくなっているような気さえた。

「……死神の鎌」

思わず、レビは呟いた。

男の背負った大鎌は、生を終えた人間の魂を刈りとり、冥界へと誘う死神の得物をたやすく連想させる。何の変哲もない、くたびれた印象のある黒ローブすら、死神のそれに見えてしまうほどに。昼の陽光に照らされいながら、夜の影よりも黒く見えてくるほどに。

レビの呟きが聞こえたのか、死神のような男はゆるりと振り返った。

男の顔はほとんど隠されていた。長い黒髪が目元を覆い、下半分も黒ローブのえりに埋もれている。前髪の隙間から見える金の瞳は、上がりきらないまぶたに半分隠されていた。

緩慢な動きも、半開きの目も、男の病的な無気力を現しているようだった。生を疎み、死にとり憑かれている、と言った方が正しいかもしれない。

金の瞳がレビを射止める。悪寒すら感じるほどに冷たい視線に、レビは体を震わせた。底の見えない深い穴を覗いてしまったような、浮遊感を伴う恐怖心が湧きあがる。

「なるほど——お前が正義の娘か」

男の声は平坦だった。

感情の起伏を感じさせない口調は、レビにさらなる恐怖を抱かせる。三人の男を前にしてなお圧倒した身体能力は、現状、発揮することができない。

レビの意志と感情を消し、圧倒的な力を与える魔術は、元々レビの意志に呼応して発動するようにはできていない。

「……なんの、こと？」

かろうじて紡ぎ出すことのできた声は、自分のものとは思えないほどに掠れていた。

昨夜、三人の男を斬殺した場面が脳裏でまたたく。レビの意志には従わず、誰のものとも分からない正義を振りかざしたあの瞬間。何も考えず、何も感じずに剣を振ったあの刹那。

浴びてもいない返り血の生ぬるさを感じて、レビは思わず頬に手を当てた。

「変わった魔術を扱う娘がいると聞いた」

コツリ、と。死神のような男の足音が、狭い路地に響く。

レビは逃げ出すことすらできず、その場に立ち尽くした。逃げられない、どころか、逃げても無駄だと思ってしまう。生きている限り死から逃れられないように、死神の姿をした男から逃げ切れることは不可能なのではないか、と。

「何にも臆さず、一片の感情も見せず、一太刀で相手を殺める娘がいる、と」
繋がりが、見えない。

男の話を理解するための、知っている前提として話されている知識を、レビは持っていないようだった。死神のような男と、おそらくはレビが使っている——というよりは、レビに使われている、魔術の間には、繋がりがあ

それを知らないから、レビには男の話が繋がっていないように聞こえてしま

う。
「殺しの動機など問わないが、オリジナルを作った人間が模倣の理由を知りたいと言っているな」

「オリ、ジナル？」

掠れた声で、再度問う。

前提として必要な知識。それがなければ、レビは男と会話を成立させるところか、男の話の半分も理解できない。

かろうじて分かることといえば、レビに使われている魔術が何かを模倣したものだということくらいだろうか。

しかし、分からない。魔術の象徴を模倣することによって生じる利益は何もないのだ。

魔術に必要なのは意志と象徴。どちらかが欠けてしまえば、意志はただのコロだし、象徴はただのモノでしかない。意志をもって象徴を選ばなければ最大限の成果はあがらないし、象徴をもって意志を補助しなければ思いは形にならない。

「まあ、誰にでも使えるものとして、普遍的な意味を持つ象徴ばかりをかき集めていたようだから模倣も容易だっただろうがな。二二の役割に見合った象徴を刻んだカード——〈アルカナ〉。百年以上前、一人の魔術師によって確立された魔術だ。その八番に、【正義】という役割がある」

言ったあと、男はひとつため息をついた。

初めて人間らしさを見せつけられ、わずかに安堵するレビだったが、続けて放たれた男の言葉に再び緊張を強いられる。

「どうやらお前は魔術師として力を振るっているわけではないらしいな。魔術師に象徴を植えつけられている——いや、象徴として使われている、か？」

「——」

「模倣したからといって罰があるわけではないが、見たところ、お前は完全に被害者だ。人間が象徴として使われ続けられれば、いずれ魔術師の意志で自我が埋め尽くされ、肉体だけを操られる存在になる。そんな死に方を望むか？」

「なにを——なにを言っているの？」

レビの問いに答えるように、男の懐から一枚のカードが飛び出してきた。

描かれているのは、漆黒の大地に立つ白亜の骸骨。手には男の背負っているものと同じ、大鎌が携えられている。

死神。男の第一印象は、そのまま彼の本質だった。

「俺は〈十三番〉。〈アルカナ〉の中でも名を呼ぶことすら忌み嫌われる【十三番】を司り、それと同じ名前を持つ。自由を望むなら、この手を貸そうか？ 正義の娘」

帰巢本能、とでもいうのだろうか。

それとも、なんらかの暗示でもかけられているのだろうか。

レビは、たとえ嫌っている相手がいるとしても、家に帰ってきてしまう。一人では生きていけない存在であることは分かっている。しかし、人間としての尊厳を奪われ続ける日々を受け止め続けるよりは、家を出ていってどこともからない場所で死んでしまう方がよほどマシなのではないか、とも思う。

生きたいのか、死にたいのか。

従いたいのか、抗いたいのか。

そんなことすら判断できないくらいに、レビの自我は摩耗しているのか。好転しない日々を、レビは変わりなく、変えようともせず生き続けている。

——結局、〈十三番〉と名乗った男の言葉に答えることなく、逃げ帰ってしまった。

ガタン、と音をたてて、木製の扉が壁に当たって跳ね返った。

玄関に直接繋がっている部屋は、ものが少ない割にごちゃごちゃした印象を与える空間だった。衣服や食器、小物類が、整理されることもなくそこらに散らばっている。ろくに換気もされていない室内には、濁った空気が満ちているようだった。

わずかに息苦しさを感じるレビだったが、窓を開け放そうとは思わない。むしろ、開いたままだった扉を閉めて風の通り道を狭めてしまう。

レビの自発的な行動を、家の主である魔術師は嫌っている。象徴に意志があつてしまつては、魔術師の意志を跳ね返してしまいかねないからだ。レビが自分の状況を変えようと行動するたびに、魔術師はその全てを潰してきた。抗う意思を摩耗させるために。

「どこに行っていたんだ、レビ」

不意に、薄暗い部屋の奥から男の声が響いてきた。

肩が跳ねあがりそうになるのをこらえ、レビはとつさに目をこらす。日の光がほとんど差しこまない室内は、昼間であってもかなり薄暗い。ものとももの境界があいまいになる薄闇の中、ぼんやりと浮かびあがってきた人影は病的にやせ細っていた。腰にさげた剣は、部屋に引きこもり続けている姿には少しも似合っていない。それも当然のこと、剣を振るうのは大抵レビの役目だった。

落ちくぼんだ眼窩に収まっている眼球が、ぎよろりとレビを見据える。

疑心に満ちた視線を向けられ、レビは思わず身を竦ませた。その様子を不審に思ったのか、男は眉根を寄せてレビに迫る。

「レビ。我が正義よ。今日は、何があつた？」

有無を言わせない声音が、男の瘦軀から放たれた。問いを拒絶することは不可能。暗く淀んだ汚泥のような男の意志が、レビの体にある象徴を伝って流れ込んでくる。

抗おうとする意志は即座にかき消され、レビは男に従うだけの人形と化した。

「(アルカナ)……の、(十三番)に、あいました……」

「オリジナルの(アルカナ)か……【正義】でないのは残念だが、力を試すには——」

レビに答えを強制していながら、男は彼女に興味を払わずにぶつぶつと呟き始める。誰かに伝えることなど毛頭考えていない、独りよがりの言葉の連なりは、やがて聞き取ることも困難なほどの意味をなさない音となる。

流れ込んでくる男の意志が次第に薄れ、レビは内心で呆れのため息をついた。この魔術師は、やはり象徴の模倣をしていたのだ。それも、百年も前に確立し、完成していた魔術を。

ここまで堕ちていたなんて。

「……おとうさん」

「無駄なことを喋るな！」

叩きつけるような言葉と同時に放たれた平手が、レビの頬に直撃した。

衝撃を受け止めきれず、レビは足をよろめかせて壁にぶつかつた。深くかぶつていたはずの帽子が床に落ちる。

「腹に天秤、額に第三の目、首の付け根にはロープのネックレス、外部からの鍵として両刃の剣……これでもまだ足りないか！ 頭部に白蛇を埋め込んでもいいんだぞ！」

男が叫ぶ。

レビをモノとして扱い続ける男は、放つ言葉にもその意志がにじみ出ている。ヒトとして見られない。ヒトとして扱われない。それなのに、妙なところで中途半端に手を抜いている男に対して、レビは腹の底から怒りを感じていた。

白蛇ならば、瓶詰めにしたものがどこかに置かれていたはずだ。頭部にそれを埋め込まない理由がどこにある？

「慈悲でも……見せてるつもりなの？」

「なんだと？」

血の味を感じながら、レビは顔をあげた。赤い前髪の隙間から、空色の光が放たれる。

——第三の目。頭蓋を削って埋め込まれたガラス玉のような眼球が、生気の

ない視線を男へ向けていた。

レビの体内には、正義に関わる象徴が埋め込まれている。内臓の一部を切除して腹部に収まっているのは、公平を表す天秤。額にある眼球は、真実を見通す第三の目。ネックレスのように首の付け根に埋められたロープは、清廉と潔白の象徴。

実の娘であるレビを、男——エイドがモノとして扱い始めて久しい。きっかけは妻、レビからすれば母親の死で、それ以来、四年間にわたってレビは正義の象徴として扱われてきた。

エイドの意志を顕現するためのモノとして。

エイドの正義を実行するためのモノとして。

「そんなに象徴として使いたいなら——〈アルカナ〉の【正義】の代わりにしたいんなら、あたしの自我なんてさっさと殺しなさいよ！」

レビが大声を出したのは、久しぶりのことだった。

身心共に疲弊する毎日をすごし、抵抗する気力もなくなったと、レビ自身か思っていた。叫び慣れていない喉が、ひりつくように痛む。

それでも、構わなかった。

今なら、抗う気力がある。自分はひとりの人間だと、主張することができる。それだけで十分だった。

「あたしはあなたの正義じゃない！」

エイドの片眉が跳ねあがった。その意志と繋がっている体内の象徴から、どす黒い感情がレビに流れ込む。

象徴として使われてしまえば、たとえ自らの思考や感情を阻害することになったとしても、レビは無自覚にエイドの意志を増幅してしまう。それは、ものが上から下へ落ちることと同じくらいに当たり前のことで、抗えないことだった。

怒り、憎しみ、支配欲、歪んだ正義観。エイドの淀んだ感情は、レビの体内にある象徴によって増幅されて彼女の自我を奪おうとする。

意識は黒く染まりはじめ、何かを考えることすら億劫になる。恐怖心はない。ただ、気休め程度の達成感と、それを支える大きな諦めだけがあった。

自分の父親を殺すよりは、よほどマシな終わり方だと、諦めをつけた。

「……我が正義」

虚ろな目で声のする方を見ると、エイドがレビの右手に剣を握らせるところだった。

「最後の調整だ。白蛇の瓶を持って地下室に——」
行け、まで聞くことはできなかった。

エイドの命令を阻んだのは、二人のすぐ隣で玄関扉がはじけ飛んだ衝撃だった。

扉を破壊した音と、扉が壁に激突した音はほぼ同時。木製とはいえ一戸建て
家屋の扉を蹴破った足は、そのまま室内への一步を踏み出した。

黒いローブ。黒い髪。金の瞳。長い柄と三日月型の刃。

「じゅう、さん、ばん……?」

自らが司るカードと同じ名を持つ男だった。

死神のような、男だった。

「心配するな。勝手に魔術師を殺したりはしない」

坦々と、〈十三番〉は告げる。

その言葉に真っ先に反応したのは、当の魔術師であるエイドだった。

「っ——我が正義! この男を正義に基づき、罰しろ!」

エイドの意志とレビの象徴が、組み合わさって魔術を発動する。

炎や風などの明確なかたちを伴うことなく、ただ「エイドにとつての正義」
を貫くための魔術。レビの意志を奪い、体に乗っ取って正義を遂行させる魔術
を。

迷いもためらいも持たず、レビは剣を片手に〈十三番〉へと突進する。風を
裂いて繰り出した刺突は紙一重で避けられ、薙ぐように振った追撃すら潜りぬ
けられる。

当たらない。上下左右、背後にまわりこんでも当たらない。刺突、斬撃、牽
制の蹴りも、回避直後を狙った拳すらも。

「変容のきっかけを与えにきた」

連撃を避け続けながら、〈十三番〉の言葉は淀みなかった。

エイドが〈十三番〉の乱入に動揺しているためか、口だけがレビの意志に従
って切れ切れの言葉を紡ぎ出す。

「なに……言って……」

「意識を強く持て。自分に関わる選択を誰かに任せるつもりか」

流れるように続く声に、息のあがった様子はない。ひとつ間違えば死の危険
性もあるというのに、鎌を手にとる様子もない。

【十三番】が司る役割は、死だけじゃない。それに伴う再生と、物質界から霊
界への移行、変容も含まれる」

首を狙った一撃は、上体を反らしただけで避けられた。血の一滴どころか、髪の毛一本すら散らすことができない。普段から相手にしているような者なら、何十回と殺せるほどには剣を振っているはずなのに。

じわり、とレビに恐怖心が湧きあがった。殺意を向けられるだとか、誰かを殺してしまうなんていう、感じ慣れた恐怖ではない。

〈十三番〉という個人に対する恐怖。必殺の一撃を回避し続ける男に対する恐怖。

そして——回避の間、目を合わせたまま一瞬たりとも視線を外さない金の瞳に対する恐怖。

それらが消えることなくレビの中に留まっているのは、感情をなくすように仕向けていたエイドも同様に恐怖しているためだろう。必要以上に増幅された感情にまかせ、レビは鳴りそうになる歯を食いしばって剣を振るう。

本能的な判断だったためか、切っ先は胴体に向けられた。首を狙った連撃の合間に放たれたこともあって、〈十三番〉の回避が間に合わない。体をひねるようにして致命傷は免れたものの、遅れたローブの下、右の肩口に、

「——？」

刺さらなかった。

黒いローブだけを買いた切っ先に、それ以上の手応えがない。皮膚を裂き、肉を貫き、骨に当たる感触が欠落している。布の生地を斬っただけの、空振りに近い手応え。

「これは俺の話になるが」

唐突に、〈十三番〉は話を切り出した。

留め具付近を裂かれたらしいローブは、〈十三番〉の動きに振り回されて大鎌を背負うベルトにぶら下がって止まる。下に隠されていた体はローブと同様の黒い衣服で覆われていたが、その両肩から先、袖の中にはなにもなかった。余った袖部分は固く結ばれ、両腕が欠落していることを強く意識させる。

「俺が【十三番】の力を得ようとした理由は、浅はかな復讐のためだ。故郷と家族と恋人を失い、敵の前から逃げ出して、それでもどうにかして復讐したいと思った結果がこれだ」

再び、レビの意志とは無関係に、右腕が剣を振るう。

繰り返される攻撃と回避。その間も、〈十三番〉は言葉を揺るがさない。

「得た力で復讐を果たした。代わりに、名と両腕を失った。なくしたものは多いが、これが最善の道だったと今でも思っている」

平坦な口調で語られてはいるが、その裏には深い悲しみが垣間見えた。手を止めたい、という思いがレビの中で芽生えるが、今が好機と感じているらしいエイドは、レビの感情をことごとく抑えこんで消し去ろうとする。

止めたいと思つては思いが消え、悲しいと感じては感情が去る。

幾度となく繰り返された、レビにとっては日常的な場面だった。何を思つても、何を感じても、その直後には全てが無に帰してしまうのは、もはやレビからすれば当然のことでもあった。

それならば、何も思わず、何も感じなくなった方が楽なのではとも、何度も思つた。

「自ら道を選ぶなら、他のことを考えずに悔いない道を選べ。他人の言葉も、他人の思想も、他人の都合もどうでもいい。自分自身が後悔しないなら、その道が最善だ。自分に関わることならば、なおさらな」

刺突をかわされ、剣の腹を蹴りあげられた。

突然の衝撃に右手がしびれ、剣がレビの手を離れて床に刺さる。とっさに柄へのぼした手を遮るように、大鎌が〈十三番〉の背から飛来。剣と同様、床に刃を突き立たせた。

風を斬る刃は、風の象徴。うまく使えば、両手がなくとも任意の方向に投げ飛ばせる。

「お前の選択は、お前にとって最善か？」

剣を取ろうとしていたレビの手が、ぴくりと引きつった。

誰だつて、自分の思想が無視されることは耐えきれない。意志も、思いも、感情も蔑ろにさえる人生に、意味を見出せるかと問われれば、レビだつて答えは否だ。

それでも、仕方がないと割り切つて生きてきた。妻を喪つて悲しむ男の気持ちだつて、分からないこともない。娘である自分が父親であるエイドを殺すことなど、とんでもないことだとも、思っている。親だから、という感情以前に、家族を大切にしたいという気持ちがあることも、レビは自覚している。たとえ、それが一方通行だったとしても。

——けれど。

だからといって、自分を殺すことが正解だろうか？ それは、レビにとっての正解ではなく、エイドにとっての正解で、エイドにとって都合のいい結末なのではないだろうか？

「居場所がなくなる、というなら、その程度は保障しよう。変容を迫ったのは

俺だからな」

家族という繋がりを、ないものとして考えてみたら？

父が抱いている母への思いを、ないものとして考えてみたら？

自分だけの都合で、自分だけの理屈で考えてみたら？

「他人の正義を代行するものとして使われるのが、お前の正解か？ レ、レ、」

「無駄な思考を今すぐやめろ！ 我が正義！」

〈十三番〉とエイド。二つの声が、同時に放たれる。

片や、坦々と。片や、叫ぶように。

問いに答える余裕はなかった。命令に従うつもりもなかった。

代わりに、大鎌の柄を掴んで、応える。

エイドの意志は、レビの思考を消し飛ばそうと躍起になっていた。意志も感情も消し去る圧倒的な支配欲が、外部からねじこまれてレビを縛ろうとする。

しかし、それは今のレビにとってそれほど脅威ではなかった。原因は、死神の鎌。移行と変容と司る【十三番】の鎌だ。

体内の象徴を通じて流れるエイドの意志を全て排除できるわけではない。けれど、弱まっているだけでもレビにとっては十分だった。今のレビには抵抗の意志がある。そして、エイドが使う象徴である剣以外の武器がある。

レビとエイドをつなぐ鎖を断ち切ることはできない。であれば、レビが罪を被らなければ自由への道はない。鎖の先端を掴むものを、殺さなければ。

「あたし、は——」

——たとえばこれは、他人の思想。

エイドを殺さなければ自由にはなれない。レビは父殺しの汚名を背負い続けることになる。

——たとえばこれは、他人の都合。

エイドはレビが正義を代行することを願っていた。レビは父親を裏切ることになる。

——たとえばこれは、他人の言葉。

母は死ぬ前に「父さんと仲良く暮らしてね」と言った。レビは母親の遺言も捨てることになる。

悪いのは父だとか。最初に裏切ったのは父だとか。母が死ななければこんなことにはならなかったとか。正論のような言い訳ならば、いくらでも並べることができ。けれど、言い訳程度で人殺しを容認できるほど、レビは強くもないし残酷でもなかった。

できることなら殺したくはない。けれど、殺さざるを得ない。生きていたいと、心の隅ではずっと思っていたのだから。

「あたしは、レビだよ……おとうさん」

視界はぼやけて何も見えなかった。

ただ、人を斬った感触だけが、レビの手にあった。

4

——三日後。

レビは円柱型の部屋にいた。建築材料である石が剥き出しになっている内装はどこか寒々しいが、天井から差しこむ自然光があちこちで反射して室内に満ちている。狭い床面積に対して天井はかなり高く、塔の中を思わせる構造だった。

部屋の中央には、一段高くなった円形の台座と、そこに刺さった剣、そして剣の周囲をまわる一枚のカードがあった。

「……【正義】」

ぼつりと呟いた言葉は、レビにとっては大嫌いな言葉だった。

正義と呼ばれ、正義として扱われ、正義を強要された日々は、レビの記憶にまとわりついて離れない。父殺しの罪も、それまでに積み重なった殺人の罪も。

レビは正義からほど遠いところにいる。清廉でもないし、潔白でもない。

それでも【正義】のカードと向き合おうと思えたのは、レビが自分の力と自分の意志で生きていくことを決めたからだ。誰かに服従するでもなく、誰かに利用されるでもなく、自分の足で立って歩くことを決めたからだ。

カードとの相性が悪ければ、デメリットだって被りうる。〈十三番〉が名前と両腕を失ったのはそのせいだし、それを考慮すれば最悪の場合、死んでしまってもおかしくはない。

けれど、レビを止める理由にはならなかった。

今までは、エイドの掲げる正義に従ってきた。これからは、自分自身が信じる正義に従う。

大嫌いな言葉であっても、もう一度、真剣に向き合わなければならぬ。〈十

三番〱がレビに変容のきっかけを与えてくれたように、誰かを救いたいと思っ
たから。

後悔しない選択をすると、心に決めたから。

レビは【正義】のカードに手を触れた。刻まれた象徴が、自分の意志に
応えてくれるのを感じながら。

〱了〱